

# 彫刻家・小田部泰久さん(中15)の人生航路 奔放、鮮やか、遅咲きの花

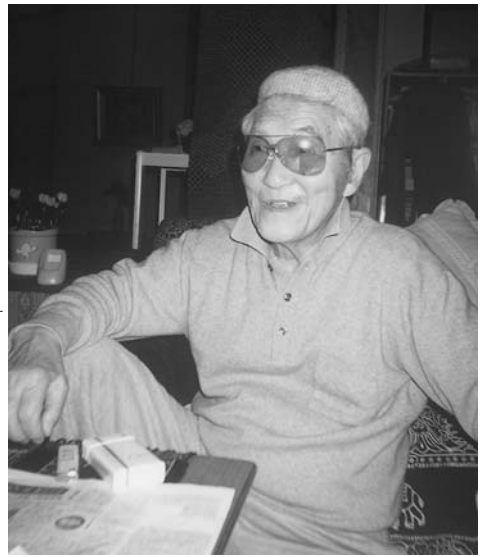
「世人は彫刻家を特別視するが八百屋や魚屋と同じで変わることはないんだ」と小田部泰久さん(中15)は謙遜する。が、人生をポジティブに生きたこの過客は紆余曲折を辿り、後年福岡市の文化賞や県の文化功労者表彰まで受けた。四年前に幽明境を異にしたが、26歳で東京芸大の門を叩く。遅咲き一輪、その一齣を聞き書きする。

## サプライズだ

福岡市城南区长尾に住む小田部さんのアトリエは一時、カラスの大群が百羽以上群れていた。電線にとまり横を向いたり、啼いているものもあり、等身大で表情もヴィヴィットに描かれサプライズ(驚き)だ。カラスに取り憑かれたのは三十年前。上杉謙信の居城・春日山城に立ち寄った際、カ



美術館の展示室を覆うカラスの群れ



自由奔放に生きた、ありし日の小田部泰久さん

ラスが一羽稲の取り入れの終った田圃の棒杭にとまっていた。父はすでに亡く母親が細々と、うどん屋を開いていた。進学など出せず上京に反対だ。徒手空拳、片っ端から生活費を稼いだ。京都・太秦の撮影所では時代劇のエキストラ。1時間270円は日雇労働者の240円より高かった。

## 荆棘の道と佳日

一方、美術研究所での受験勉強は授業料を請求されそうになると、ほかの研究機関にギア・チェンジを繰り返した。こうした授業料の梯子生活を三年間続けて、昭和28年、26歳でやっと美酒に酔う。今次の大戦で焼尽した東京その上野の杜の一角に、明治年代岡倉天心が開校した芸大はあった。今にも叢林の中から横山大観がタイムスリップして出て来そうな野趣に富んでいた。こうした天恵の佳日の中で学業に励む。

## 粘土の虜になる

当初木彫志望だったが、粘土をこねる感触に魅了され彫塑に方向転換。地行に住む安永良徳の許に走った。

## 安永良徳 中学修猷館

東京美術学校卒。大戦でシベリアに五年間抑留帰国。月に10数点も制作するエネルギーシユな彫刻家だった。安永先生の家には、戦前の美校出の人たちが増集していた。これら博識な諸彦との出会いは、知的興奮の連続で蒙を啓いてくれた。東京芸大

## 彫塑一筋

同36年、10年ぶりに博多の土を踏む。若い芸大出身者で「玄の会」を創設、毎年作品

発表を続けた。同38年、現代日本美術展のコンクールに出品。「貴婦人の贈り物」が入選した。アクリル樹脂で作ったが、これで彫塑への自信がついた。

九州大の前身、福岡医科大学長の大森治豊氏の記念像や部落解放の父・松本治一郎氏、板垣政参・元九大医学部長、今村有・元福岡大学長の胸像

## 「就活頑張れ」OB決起

### 有志の発案で支援の会開催

日本を襲った未曾有の大震災は学生達の就職活動にも深く影を落としていた。就職活動の延期・中止といった非常事態が続く、リーマンショック以降続く就職氷河期に追い討ちをかけた。同窓会ではこの状況を憂慮し、有志の発案による筑高生



「就職活動支援」に集まった卒業生たち

の筑高生による筑高生のための「就職活動支援」を行うことを決め、10月15日にその第1回目が母校の「筑心堂」で開催された。

社会人は高26回から内定が決まったばかりの高60回生まで、学生は大学2年生から大学院生まで総勢64名が集まった。

面接官経験者、シンクタンク研究員による講演会を皮切りに、多彩な企業人によるパネルセミナー、参加した全社人と直接対話できる座談会と、通常の就活セミナーとは一線を画す筑紫丘同窓会らしいぎざぎざらんな雰囲気では進んだ。

学生の側は真剣そのもの。先輩の話を生懸命メモを取り、社会人の側も真剣に向き合い学生の疑問に熱を持って答えるなど、和やかな中にも緊張感のある、非常に中身の詰まった有意義な会となった。終了後の学生アンケートでは、是非2回目を、との声が多く、社会人からも「良い取

残っている。工事の担当者は「何度鉄塊を打ち込んでもびくともしない」。小田部さんは先人の深い思い入れと、校舎がなくなるむなしさ、辛さに声をあげて滂沱した。

高52回の海江田真衣さん。彼女の発案で始まったこのイベント。定期総会で作成されたTシャツを着て、同窓生一同でシテイマラソン福岡を走ろうというものだ。

## がおか走遊会 笑顔で「敢走」

シテイマラソン福岡 平成23年10月23日「定期総会Tシャツ」を着た一団が秋風心地よい百道の海岸沿いを疾走した。

事のきっかけは、一人の女性の一言だった。「シテイマラソンをみんなで走りませ



定期総会Tシャツでシテイマラソンに参加したメンバー

## 宴座

高校に入る前から、私はある女の子に会うのを楽しみにしていた。合格発表を見た「〇かほる」さん。名は体を表すというから、この優雅な名前の女の子を私は想像した。

その時、私は心の中で「えっ嘘!」と叫んでいた。彼女は小麦色の肌に大きな黒い瞳、堂々たる体格で、バレーボールの球を抱えていた。そして大きな声でカラカラと笑っていた。彼女の圧倒的な存在感に私の「かほる」さんは軽く一蹴されてしまった。

その後、数十年の時を隔ててまた同窓会で彼女と顔を合わせるようになった。ある日私は彼女が催す茶会に招待された。活発で豪快な(失礼)彼女が茶の湯、懐石料理も作るという。それこそ「えっ嘘!」である。

そして出された料理に驚いた。どれも美味しく美しく、美的感覚に溢れた見事なものだったからである。私は彼女の長年の研鑽に圧倒された。こうして私の第二の「かほる」さん像もまたしても一蹴された瞬間だった。

年に数回会う彼女だが、いつ会っても元気で楽しい。そして、相変わらず大きな声でカラカラと笑っているのである。(高13 門司寿子)